校長室だより～燦燦～ №８１１

もがいている先生

2023.8.5

２０１１年、平成２３年、９月１６日には、小学校の初任者の授業を参観した。小学３年生の国語の授業だった。すぐに苦労していることがわかった。教室に入ったときの空気で、授業がうまくいきそうだとか、学級経営の状態がわかるものである。この先生が、１学期からもがいていることは、容易に想像できた。

それでも、一生懸命努力している姿を見ることができた。子どもの発言をきちんと受け止めている。だが、先生に余裕がない。学習訓練、しつけがあまい。「おしゃべりしないよ。しっかり見るよ。」というのだが、子どもは反応していない。「Ａさせたいなら Ｂといえ」をアドバイスした。もっと表情があるとよいことも話した。

授業を見ていて、自分の初任者時代を思い返していた。同じ３年生だった。せっかく１年生と２年生で育てていただいた子どもの国語力の貯金を、私は１年間で、あっという間に使い果たしてしまった。１学期は、学級も落ち着かなかった。だから、この先生の気持ちがわかるのである。

めあてを書くときに、「一緒に書くよ」といっているが、子どもの書いている様子は見ていない。短時間で机間指導することをアドバイスした。教科書を読ませても、読んでいない子もいた。起立させて読ませるとよいことを伝えた。

授業を見ていて気づいた。先生が話していた２３分間は、集中していなかった。ところが、ローマ字を書く活動になったら集中するようになった。「できたかな」ではなく、すばやく机間指導して判定してあげるとよいことを話した。授業が平板になっているため、１５分間に１回は、学習形態を変えると集中できるかもしれないことも伝えた。

子どもは、もっとかまってほしい、声をかけてほしいのである。授業に関係ないことを話してしまうのは、授業が子どもにとって楽しいのかということである。この先生はまじめである。だが、まじめだからいいわけでもない。学級経営に何か柱がほしいという話をし、自分の経験を伝えた。少しでも、きっかけになればと考えた。

あれから、１２年である。この先生は、採用が少なかった時代の先生である。教育界にとっては金の卵である。今でも、悩み苦しみながらもがんばっていることだろう。あのときは、できなかったこと、わからなかったことも、今はできるようになったかもしれない。そういうものである。もしかしたら、今でも、もがいているかもしれない。それがわるいわけではない。教員は、ずっともがき続けるべき存在なのかもしれない。毎年、毎年、初任者をはじめ、もがいている先生方がいる。心から応援したい。